

鵜殿石仏群（うどのせきぶつぐん）

山岳仏教の面影を残す九州有数の石仏

松浦川中流域の鵜殿窟に刻まれた磨崖仏群。50cm余りの小仏龕ぶつがんから5mを超える不動明王まで60余体の磨崖仏からなっている。鵜殿窟は高さ50mほどの丘陵の中腹にあり、岩壁に十一面を持ち合掌する観音坐像を中尊として、左右に甲冑かっちゆうをまとい武器をもった持国天像じこくてんと多聞天像たもんてんが浮き彫りにされ、いずれも彩色されている。

制作年代は南北朝時代とされているが、伝承によれば、唐で密教を学んだ空海（弘法大師）が帰国の際にこの地に立ち寄り、阿弥陀・釈迦・観音の三尊を刻んだのを始まりとしている。その後、鵜殿窟内に鵜殿山平等寺が建立され、松浦党を率いた岸岳城主波多氏の篤い信仰や援助もあって隆盛した。しかし16世紀、竜造寺氏との戦いで焼失したため、波多氏の遺臣久我八郎左衛門尉がこれを再建し、明王院と号して修験道場となった。

昭和31年3月1日 県史跡（石仏群）指定

唐津市相知町相知字和田

分野 歴史

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



武人の仏、多聞天像

密教色が強く感じられる石仏群。中世につくられた磨崖仏として貴重な史跡である

（『唐津探訪』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『唐津探訪』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html